私ト血ノモノガタリ。

端微視

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私ト血ノモノガタリ。

【Ｎコード】
Ｎ７９９５Ｅ

【作者名】
端微視

【あらすじ】
血。僕らに流れる命。争い。俺たちが流した、想い。誰も救われない運命だった。それでも、終わりにする。この、真っ赤な戦いを。

エピローグ

――――――『血の世界』。　いつか、『俺』はそんな場所に、居た気がする。

忘却の先にある、満月の空。　『僕』は何も憶えていない。ただ、懐かしい景色だけが静かに広がる世界だと思える。

両の手で、大きな包丁を握り、僕を見上げるちいさな少女。　鼻緒の切れている左方の草履を、気にも留めない。

思わず瞬きしてしまうはっきりとした色。　雛罌粟（ひなげし）のような、もしくは真っ赤な血色のような、着物を纏う。雪のように白い帯は控えめに目立つ。　ところどころに表わされている蛇は、自らの尾を食んでいる。　それはそれで、滑稽とは言えない。それは僕のように思えたから。

きっと『何かを知っていたはず』の僕であろうと、きっと見たことの無い、奇跡とでも喩える事が出来る彼女の人姿。

少なからず枝毛があるものの、月光が、ながくて足元にまで届きそうな黒髪に映って、妖艶に見えてしまう。

今まで生きて、一度も太陽の下に出たことが無いのかもしれない程、肌は清潔な白色で、きっと触れることができるなら、穢れて壊れてしまいそうな緻密な感触だろう。

そして、何一つ欠点など在り得ないと、断言できてしまう整い過ぎて逆に不自然に思える顔。　欠点が無さ過ぎて、少女であるはずの顔面は、可愛いと表現するには勿体無い。　成長したら、どんな美女も霞んでしまうような女になるだろう。　だが、今は人形には

違いなかった。　表情の無いように視える、世界で一番可愛い『人形』。　自分では動くことも分からず、苦しくて痛い悲しみだけを許容してしまうような心を、大きくて黒い瞳に宿して。

自分で感じたことなのに、『人形』というのなら、この子は不完全だろうな。震えた手で、実に、実に、悲しそうに、　それでもちゃんと自分を殺して、僕に告げる。

「『また』、私を置いていくのなら……、いっそこの手で、　殺し、ころしてやる……、　」

はて、
僕は何をしたんでしょうか？
なぜ、
僕は此処にいるんでしょうね？
殺されるような理由を作ってしまったとしたら、僕は『生前』、あるいは『本当の僕』は、何をしたんだろう。　君は何を言ってるんだ、と言われてしまうかもしれないが、僕は。

『誰かに殺された真実しか、　何一つ覚えていない。』

此処は死後の世界なのかと、そう思うことも出来そうだ。　僕ら二人の周りを、群れた『黄色いスイセン』の、心地よい風になびいて小さく小さく花弁が傾く姿を見渡しながら。　月光によって、吸い込まれそうな漆黒であるはずの空は目映く、明るく飾ってくれる華がこんなにも広い大地を限りなく埋め尽くしている。　向こうを見ても向こうを見ても、どこまでもスイセンの輝きが見えるから、この場所が僕の眠る場所なら、悪くは無い。

僕は、正直に彼女に告げる。　それ以外に選択肢があるなら、迷わず嘘をついてしまうけれど。

「君のことを僕は、知らない。　君を置いて行ってしまったことは謝るが、　それで僕は何をしてしまったんだ？」

何でこんなに、情けない言い方しか出来ないんだろう。　覚悟した。　彼女が僕を殺したいというなら、その切先で僕を貫いてください。　都合の良い事だ。　それならば、僕は過去の罪さえも忘れ切ってしまったのだから。彼女を殺意に駆らせる罪が、そんなに重い十字架が気づかずに僕にのしかかっているなら、思い出したくは、無い。　目の前の彼女が、僕の『罪』とするなら。死ぬことだけでしか、償えないのならば。

何故、僕は此処にいるのだろうと考えても無意味だが、それ以上に僕は驚くことを見つける。

僕が何も思い出せない事など、それに比べれば遥かに心が痛んでしまうことだ。　それは、僕が男であり、それが僕のせいで起きているとなれば、尚更苦しい。

「私は……、　私は…私は……、　」

ちいさいからこそ美しいその手から、落ちたのは何も僕に刺さろうかと迫っていた包丁が柔らかい地面に落ちたことじゃない。

彼女が必死で、必死で殺していたはずの感情を、隠そうとしていた大きな思いを、僕は一言で壊してしまったのかもしれない。

なぜなら、　彼女の淡い雪のような白い頬を、　それは透き通る湧き水のように一筋、雫がふっと、ぽたりと僕の足元にはじけて落

下したからだ。

泣いている。

そして、僕は純粋に、全力で願うのだ。　泣かないで。泣かないでおくれ、どうか。どうか、

「わからないの……、　憎めばいいのか、また最初から……、どうせ貴方は何もかも忘れてるのに、　殺したいほど憎らしいのに……、」

彼女は、僕を摺り寄せるようにして、僕を殺そうとしていたはずの手が優しく僕を包んだ。　それは、美しい彼女に求められるようで、とても喜ばしいはずなのに、なぜか自分が違う場所にいるような感情になった。

この子は、一体どうしたというんだろう。　彼女の想いが、一握りも僕には分からないのだが、それでも僕は、彼女の濡れた頬を優しく撫でる事が出来るのだ。

「……僕も、分からないんだけど、　……泣かないでよ……。ただ、ただだよ？　君が泣くってことは、それだけはたしかに苦しいことさ。だから……」

泣かないで。

僕は汚れているのだろう。　彼女の涙を拭う役など、本当は引き受けてはならないかもしれないけれど、それでも彼女が僕の胸の中で、心から悲しみを吐き出しているのなら、僕はそれを器ですくう事が出来るから。

「……此処は、『夢の中』。　私の夢でも無いし、貴方の夢でも無いけど」

彼女は、上擦る声を引きずりながら、僕に一言告げた。　夢の中？　僕の目にははっきりと、元来の世界の姿が映っていたと思っていたのだが。これは僕の住んでいた世界では無いのか？　あるいは僕は死んでいて、その後に行くことになるであろう世界では無かったのか？　そして、僕の夢でも貴方の夢でも無い？　でも、これが僕の夢だとしたら、彼女の言葉が嘘だという可能性もある。嘘をついているような顔じゃなかったが、僕は汚い人間だから。　信じられない。　心から、何かを信じるという事もね。

「何もかも、忘れているんでしょう？　なら……、」
彼女は、一度悲しい眼を僕に向ける。　すると僕の当てられていた細い腕を外すと、着物の袖で流れ落ちた涙の線を拭く。
僕は背が小さくて、彼女は女の子の中でも恐らく小柄だけど、彼女が背伸びするだけで僕の首に寄りかかることが出来てしまう。
彼女は僕の首筋を取り付くように触れて、指先で何かを描くと、子猫が皿にあげた牛乳を舐め取るように、まるで無邪気に僕の首を一回舐めると、

「……分かった。　きっと、止められない絶望が待っているのだけれど、貴方の顔を見て、気が変わった。なら、　貴方が一体、『何をしたのか』、見せてあげる。　私の苦しみも、貴方の苦しみも、どんな世界に居たんだろうか、って」
本当に悲しそうに。　心から悲しそうに。　それなのに、僕という存在を全て許すかのような優しい声で。　それからどうしたかって。

下に落ちた包丁をおもむろに取ると、

「　うぅっ……、　」

その銀の切先を、躊躇も無く、何の心配も無く、僕は恐ろしく、彼女は悲しそうに笑って、
細腕を、　その綺麗で無機質な腕を、危なげで悲しそうに手首を、
切った。

「な、何を……」
あれ……。　眩暈が、　というよりはとても眠くなってきた……。
いや、もっと感じる事は、『此処に居てはいけない』ような、本当は僕にはやらなきゃいけない事があったはずなのに、

血が、『血』が、それはそれははらりはらりと、不思議と痛々しく無さそうで、涙と同じような感覚で地面に落ちていく。　紅い雫。

「お願い……、　『最後の力』だから……」

ダメだ……。　僕は意識を失っていく。　立てない、彼女は悲しそうだったなぁ。最後まで最後までも。僕は渦巻く何かに引き込まれる。

花々は風に吹かれ。花びらを夜空へ、虚空へ上らせる。
君はどこかに遠ざかる。
僕は、
元いた場所に消えてしまうのかな。
それは、それで悲しい。
何かを思い出すのかもしれない。　それでも、ここには戻っては来られないだろうな。

『あいしてるから。　わたし、いつまでも。　いつも、

つたえて。　やっぱり、わたしだめなの。　だから、わたしをころして？　わたしはあなたをころしてしまうかもしれないから。
みんなをころしてしまうかもしれない。
もう、いっぱいいっぱいだから』

視界は消えた。
或る日の夢だ。　ずっと、前の話だ。
僕は、　きっと思い出す。
『血の世界』を。

「『俺』だって、俺だって愛してる！　愛してる！　だから……、」
いつの間にか。　彼女の血痕がまだ、残ったしわしわの白いシャツは、まるで、　ああ、
涙が、死ぬほど止まらない。　血をぼたぼた流すより、痛いんだぜ。

なんだって、
なんだって、

「　終わらせてくるから、全て　」
みんなが笑える世界に。
みんなが血を流さなければならない、世界なんていらない。

『僕』は。
『俺』は。

最後の血を、流してくるぜ。
それは、綺麗な道を作るんだ。

血にまみれた戦いを、　いや、　そうじゃない。　みんな泣いてるんだ。誰もが体中から紅い涙を流して、みんな不幸になって。だから、止めるんだ。　失ってしまった過去は流れる『血』のように止まらないけど、
未来なら。　せき止めることは出来るんだ。

『俺達』は、幸せで、
『僕達』は、いつも不安で。
それでも、
血液を、『私たち』に流れる血を、無駄にしないで。　幸せになる為に血を流すんだ。　誰かを救うためにこの血を使う。死んでもいい、死んでもいいから、

救うんだ。
真っ赤で、くだらない戦いを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7995e/

私ト血ノモノガタリ。

2010年10月10日03時38分発行